あり思第五巻
連載電書01

オープニング草稿

オープニング

　とおい、とおい、とおーい、
　未来の話。

　「ワヲンって子が　いたんだよ」

　ワヲンは普通の子とは違って、
白い髪で青い瞳を持つ女の子で、
おじいちゃんと二人で暮らしていました。

　ワヲンは白いヒゲのおじいちゃんが大好きで、
「じいちゃ」と呼んでいました。

　ワヲンはじいちゃから、
「お前のお母さんは遠くへ行ったんだよ」
　と言われていました。

　ワヲンはいつか、遠くへ行った「かあちゃ」
を探しに行きたいと思っています。

　ワヲンはじいちゃから、不思議な楽器を習っています。
　それは音を消すことができる楽器です。

　この音を消す楽器で、音の怪もの－おとのけもの－と呼ばれる
恐ろしい怪物を退けるのです。

　ワヲンの家はそうしたことをする音師－おとし－
と呼ばれる一族なのです。

　いずれ、ワヲンも
　音師になるのでしょうか？

　ある日、ワヲンの住む村に
賑やかな歌舞音曲を奏でる
楽団がやってきました。

　いつもはじいちゃに楽団の催しを
見物するのを止められているワヲンですが、
今回は黙って楽団を見に行きました。

　楽団の中心には、美しい黒髪の女性が双竪琴－ダブルハープ－で
ワヲンが聴いたこともない曲を弾いていました。

　美しい黒髪の女性、その人はトニクと呼ばれていました。

　楽団は村の近くの洞穴に泊まっています。
ワヲンはこっそり、トニクさんに会いに行きました。

　とても、トニクさんに惹かれるものがあったからです。

　トニクさんもワヲンを見て、とても懐かしい気持ちになりました。
でも、それはどうしてなのか、トニクさんにはわかりません。

　ワヲンはトニクさんの話を聞き、トニクさんはワヲンの話を聞きました。

　トニクさんには、昔の記憶がありません。
ワヲンの住むこの村で行き倒れていたところを助けられ、
旅回りの楽団に拾ってもらったというのです。

　ワヲンはじいちゃと暮らしていることと
音師になって遠くにいったかあちゃを探しに行きたいことを
トニクさんに話しました。

　そんなワヲンの身の上話を聞くとトニクさんは
ワヲンが不憫でなりませんでした。

　この子は自分の母親が亡くなっているだろうことを、
幼くてまだわからないのだ、と思いました。

　トニクさんは自分が持っていた奇妙な形の金物を
水に浸すと、水の膜が張った楽器をつくりました。

　「これは水管楽器と呼ばれるものなの。
　　あなた、吹いてごらんなさい」
ワヲンはトニクさんに渡された楽器で音を奏でました。

　水の楽器を吹くとトニクさんも
双竪琴で曲を弾き始めました。
それはとても哀しい曲になりました。

二人のところに団員の人がきました。
「ワヲンちゃんのおじいさんが、
団長のところにみえられているわよ」

「ええっ？」

ワヲンはいいつけを守らなかったことで、じいちゃに
叱られると思って、急いで村に戻りました。

急いで、家に戻ろうとしたワヲンですが、
なんと、村が異形の怪物に襲われています。

音の怪ものです！

いつもは、じいちゃが音の怪ものを退治しますが、
今は洞窟の方にいて、それもできません。

音の怪ものは村中のものをなぎ倒して
暴れまわり、手がつけられません。

ワヲンは意を決して、音見眼鏡と不思議な楽器を
持って、暴れる音の怪ものの元へ向かいます。

　音の怪ものがうなり声をあげて吠えると、
周りのものが爆ぜるように壊れました。

　村人たちは何が起きたのか、わかりません。
でも、音見眼鏡をかけたワヲンには見えます。

　色のついた音が音の怪ものの口元から放たれ、
その音がものに触れて、爆ぜて壊れているのが
音見眼鏡を通して見えます。

　ワヲンは不思議な楽器を構え、色のついた音と
同じ色の弦を弾くと、色のついた音は掻き消えた……

　と、思うと白い球体に変わり、音の怪ものへ向かって
ものすごい速さで飛んでいきます。

　球体をぶつけられた音の怪ものはあまりの衝撃によろけます。
　無音奏者－むおんそうじゃ－ならではの、
音を持って音を制する、です。

　でも、音の怪ものもただでは、倒されません。

　ワヲンは持ち直した音の怪ものの
激しい攻勢にさらされて、
つまずいてしまいました。

　そこへ、音の怪ものが止めとばかりに、
色のついた音である破壊擬音―はかいぎおん―を
放ちながら、おぞましい声をあげました。

　破壊擬音がワヲンを襲います！

双竪琴のきらびやかな音が鳴りました。
すると、ワヲンに向かっていた破壊擬音は消え、
白い球体が音の怪ものに向かっていきます。

「ワヲン！　立つのよ。
あなたは弱い子じゃない」

トニクさんも無音奏者だったのです。
そして、ワヲンの危機にやってきたのです。

音の怪ものは最後の力を振り絞って襲い掛かってきます。
しかし、二人の無音奏者にかかっては音の怪ものも分が悪く、
ついには、打ち倒されます。

洞窟にいたじいちゃは、ワヲンとトニクさんの元にかけつけました。

「お久しぶりです」と、トニクさんはじいちゃに頭を下げました。
じいちゃはトニクさんに、「うちのワヲンを助けてくれて、ありがとう」
と言うと、トニクさんはこう言いました。

「あの子が　もしも　私の妹だったら
もしも　私の娘だったら
そう思うと、いてもたっても　いられませんでした」

じいちゃは思い出します。

昔、白き者と若い自分の娘が出会ったこと。

白き者は奇妙な形の金物を持っていたこと。

やがて、白き者と娘の間にワヲンが生まれたこと。

白き者が招きよせたように、音の怪ものが現れ、村を壊滅させたこと。

白き者が息絶えると、音の怪ものは去るが

災いを齎した白き者の妻として、娘を追放することに村中が決めたこと。

二度と、村のことを思い出さないように、
音師の秘音を娘に聞かせ、記憶を封じ楽団にあずけたこと。

「どうかなさいましたか？　サブドミナントさん」

トニクさんは、物思いにふけるじいちゃを怪訝そうに見ていました。
「いいえ。なんでもない。なんでもない」

楽団が村を去る日、トニクさんはワヲンに会いにきました。

トニクさんは、あの奇妙な形の金物をワヲンに握らせました。
そして、ワヲンの手を強く握ると、自分の手を離しました。
ワヲンは驚いて、トニクさんを見ました。

トニクさんはワヲンに微笑みかけています。
「トニクさん、これ、大切なものなんでしょう？」
「いいの。それはあなたに持っていてほしいの」

「おかあちゃんに、いつか会えるといいね、ワヲン」
「うん。きっと、かあちゃに会う！」

と言って、ワヲンは笑いました。

それから何日かしたある日、
ワヲンはいいことを思いつきました。

音師の格好に着替えて楽器を持ち、

「かあちゃを探しに行ってきます」
とじいちゃに置手紙を残して、

ワヲンは村を飛び出ました。

とりあえず、トニクさんの楽団を追ってみることにします。

楽団に加われば、いろいろな場所に行けて、
かあちゃのこともわかるはずと
ワヲンは思ったからです。

ワヲンの冒険が始まる。

リンク

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=964529

0

O-01

0-01-05

マリア・アンナ・ヴァルブルガ・イグナツィア
ことナンネル　もう一人のモオツアルトに捧ぐ

0-01-05.jpg

0-01-06

音がしないが鳴り響く

O -01-06.jpg

0-01-07

サイレントエフェクト

静音効果

0-01-07.jpg

0-01-08

彼はやがて、腰から革袋をとって彼女に差し出した。
「これをさしあげよう。持っていきなさい」
「これは？」
女は老人の手から革袋を受け取りながら、けげんそうにたずねた。
「今はほろびた。遠い星の土が入って入っとります。これを持って行きなさい」

白き異邦人　筒井康隆
エピタフ

0-01-08.jpg

0-01-09

私は歌
全時代最高

私の歌
全時代最高

O-01-09.jpg

あり思第五巻 連載電書01

著　　五島千尋

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社